2013年愛知県立大学・サンパウロ大学 哲学文学人間科学部共同国際シンポジウム

発起人　久冨木原　　玲
宮　崎　真素美
丸　山　裕美子

1. テーマ

「古典文学の多元的地平―翻訳文学と歴史学との結節点をもとめて―」

2. 趣旨

2013年3月，本学の協定校であるサンパウロ大学哲学文学人間科学部に附置されている日本文化研究所（Centro de Estudos Japoneses）の研究員（同学部ポルトガル語日本語学科教員）によって，『枕草子』のポルトガル語訳“*O Livro do Travesseiro*”が出版された。約千年も前に書かれた日本の随筆の嚆矢とされるこの代表的古典は，ブラジルでも名高い文芸雑誌で「10世紀末の日本における社会的関係・恋の駆け引き・女性らしさの歴史を語る東洋文学の古典」として大きく紹介された。折しも，日本文化学部が完成年度を迎え，国語国文と歴史文化の両構成学科による「日本文化学」の構築とその発信，さらに海外におけるその受容のありかたを今後の課題としている時に，この労作が世に問われ，日本文化学部が時を措かずにこの朗報に接し得たことの意味は大きい。

本国際シンポジウムは，学部をめぐるこうした内外の動向を千載一遇の機会と位置づけ，「翻訳」と「歴史」の学問的結節点から開かれる「古典文学の多元的地平」を展望することが日本文化の発信には不可欠であるところから，協

定校による共同主催の形で開催するものである。

文学は人間や社会について根源的な問いかけをして言語化する表現形態であるがゆえに，多元的かつ重層的である。そしてまた，そうであることによって，社会の中で各人が自らを同定し，他者と結びつく契機を深いところで思考する学問領域である。かつては予想だにできなかったIT社会と有り余るほどの情報が氾濫する今日の社会状況の中では，そうした人間的かつ社会的関係性が見失われがちであるが，このような時代だからこそ文学はすぐれて現代的課題を負っている。

古典は各時代において常に読み変えられ更新されることによって，古典たり得て来た。即ち，その都度，新時代の息吹が吹き込まれ，時代を支える諸条件と深く結びつくことによって，新たな読みを可能にし，その営みの中で享受された作品だけが古典として生き残ってきた。ゆえに古典こそは，各時代の枠組みを照らし出す光源としての意義を担ってきたのである。これに対して外国語による翻訳は自国語への現代語訳と並んで，古典を今日的に再創造する営為である。古典日本語を現代日本語に，また外国語へと訳出する際に伴う困難さを認識し共有することは，《日本と外国》《過去と現在》の時空的な境界を往還することを通して，日本の古典文学を現代によみがえらせる意義を担っている。

本シンポジウムは以上のような趣旨に即して「第一部　古典の再創造としての翻訳文学」と「第二部　歴史の光源としての古典」の二部から構成される。その際，ユニークな試みとして，第一部の冒頭2つの報告を承け，社会科学の視座からの「翻訳」と「古典の受容」に着目した問いかけを設定する。こうした異分野からの発問によって，続く文学・歴史学といった人文科学における問題提起が，自らを相対化する契機を得，《古典文学の多元性》と《日本文化の重層性》への解析度を深めていくことが期待されるのである。

第一部ではまず，明治期に西洋思想や文学及び漢文や日本古典を取り混ぜて創作された新体詩の考察から，翻訳概念そのものについて問い直す。次に『枕草子』ポルトガル語訳にまつわる具体的実践的な2つの報告を得る。そして第一部の最後は，これらとは対照的に近世史から日本国内の地域差や〈地方・国家〉の関係に着目した「翻訳」を問うことによって明治期の翻訳との位相につ

いて考察する。グローバルな視点及び実践とともに,「翻訳」とは外国語によるものだけでない多様さを包含することに注視したい。

第二部では第一部を受ける形で，チェコ語への翻訳の泰斗によって日本の古典を現代に新生させる「翻訳文学」について理論的側面も併せた提言を行う。これを受けつつ日本の古典それ自体を取り巻く時代的文化的な諸条件の問題に関する考察を進めていくが，そもそも古典研究それ自体が西欧文学理論の導入によって，研究の方向性が大きく変化したことを忘れてはならない。日記文学研究はその一例であるが，その「翻訳理論」導入については見過ごし難い問題点があった。本シンポジウムでは，その危うさに関する問い直しを試みる。一方,「翻案」という観点から『南総里見八犬伝』の一場面を採り上げる。そこには中国故事と東海地方にゆかりのある伝承（愛知県安城市の聖徳太子伝承）が混在しており，その点に着目し，江戸で書かれた読本において，どのような作品世界が創出されているかという問題を掘り起こす。これは東海地域が江戸という文化空間と交錯する興味深い例でもある。第二部の最後には，最古にして最大の翻訳文化である仏教受容の問題を置く。仏教は梵語から漢文を経て和語へと翻訳され, 古代から現代に至る日本文化形成の枢要な部分を担ってきた。ゆえにそれは翻訳・文学・歴史のいずれにも深くかかわるのである。このような問題意識から，翻訳・文学・歴史にわたる問題系について考察し，その文化的枠組みを照らし出す光源としての古典の輪郭をつかみとっていく。

本シンポジウムはこのように，グローバルとローカルの両面から古典文学の多元性を明らかにしていく。無論，グローバルとローカルという概念は既に常識化しているだけに，斬新な分析を行うには難しい面もあるが，このことをよく自覚しつつグローバルがいかにローカルに根付いているかを，上記のような多面的な取り組み，即ちマクロとミクロの視点を交差させつつ分析する。このように次元の異なる２つの枠組みによる認識は，人文科学の方法はもとより，これを突き抜けた先にある隣接諸学の領域から逆照射されることによって，批判的視点を受け止めつつ新たに練り上げられていくべき概念として有効性を持つはずである。

3. シンポジウム内容・構成（2013 年 12 月 14 日）

10：30－10：35　●挨拶　　高島　忠義（愛知県立大学学長）

【第一部　古典の再創造としての翻訳・現代語訳】（10：30－12：35）

司会　　東　弘子（愛知県立大学外国語学部）

10：35－10：55　①新体詩・翻訳・古典

宮崎　真素美（愛知県立大学日本文化学部）

10：55－11：15　②ポルトガル語と翻訳―『枕草子』の場合―

Madalena Hashimoto Cordaro（サンパウロ大学）

11：15－11：35　★コメンテーター★

・社会科学から見た『翻訳』の機能と『古典』の海外的受容―問題提起にかえて―　　川畑　博昭（愛知県立大学日本文化学部）

11：35－11：55　①古典日本語のポルトガル語訳―『枕草子』の場合―

Junko Ota（サンパウロ大学）

11：55－12：15　②歴史と「翻訳」―近世史学の視点から―

大塚　英二（愛知県立大学日本文化学部）

12：15－12：20　★コメンテーター★

・交流史の中の翻訳　　丸山　裕美子（愛知県立大学日本文化学部）

12：20－12：40　《討論・質疑応答》

―― **昼食　12：40－14：00** ――

【第二部　歴史の光源としての古典文学】（14：00 ～ 15：30）

司会　　久冨木原　玲（愛知県立大学日本文化学部）

14：00－14：20　①「古典の翻訳」という営為―『古事記』のチェコ語訳について―　　Karel Fiala（福井県文書館副館長）

14：20－14：40　②西欧文学理論の応用―日記文学研究を例に―

今関　敏子（川村学園女子大学）

14：40－14：45　★コメンテーター★

・翻訳・言語・社会　　犬飼　隆（愛知県立大学日本文化学部）

14：45－15：05　①伝承と翻案の混在―『八犬伝』の一場面をめぐって―

三宅　宏幸（愛知県立大学日本文化学部）

15：05－15：25　②仏教という翻訳文化―知の継承・思想の主体をめぐって―

上川　通夫（愛知県立大学日本文化学部）

15：25－15：30　★コメンテーター★

・伝承・仏教・文学　　高橋　亨（名古屋大学名誉教授）

15：30－15：50　《討論・質疑応答》

――　休憩　15：50－16：20（質問票の整理）　――

【全体討論とまとめ】（16：20－17：00）

◆全体討論

◆まとめ　　総合司会　　久冨木原　玲

2013 年愛知県立大学・サンパウロ大学哲学文学人間科学部共同国際シンポジウム

古典文学の多元的地平

翻訳文学と歴史学との結節点をもとめて

2013 年 12 月 14 日（土）10:30 ー 17:00　愛知県立大学　講堂

2013 年 3 月、本学の協定校であるサンパウロ大学の先生方が『枕草子』のポルトガル語訳を完成されました。この翻訳を中心的に担われたのが、ジュンコ・オタ先生とマダレナ・ハシモト先生です。また、『源氏物語』や『古事記』のチェコ語訳をはじめ、精力的に日本古典の翻訳に携わっておられるのが、福井県文書館のカレル・フィアラ先生です。

このたび、三先生を本学にお招きし、古典文学がどのように海外に開かれていくのか、その実践から問題提起をしていただき、日本の古典研究者と日本文化学部の教員とが、研究報告と討論をおこないます。

古典の翻訳は空間的な越境だけでなく、時間を越境する営為でもあります。「文学」と「歴史」双方の視点から、「翻訳」の持つ多義的で豊かな相貌を照らしたいと考えます。

シンポジウム内容・構成

10:30－10:35　●挨拶　　高島　忠義（愛知県立大学学長）

【第一部　古典の再創造としての翻訳・現代語訳】（10:35－12:40）　司会　東　弘子（愛知県立大学外国語学部）

10:35－10:55　①新体詩・翻訳・古典　　宮崎　真素美（愛知県立大学日本文化学部）

10:55－11:15　②ポルトガル語と翻訳―『枕草子』の場合―　　Madalena Hashimoto Cordaro（サンパウロ大学）

11:15－11:35　★コメンテーター★

・社会科学から見た『翻訳』の機能と『古典』の海外的受容―問題提起にかえて―

川畑　博昭（愛知県立大学日本文化学部）

11:35－11:55　①古典日本語のポルトガル語訳―『枕草子』の場合―　　Junko Ota（サンパウロ大学）

11:55－12:15　②歴史と「翻訳」―近世史学の視点から―　　大塚　英二（愛知県立大学日本文化学部）

12:15－12:20　★コメンテーター★

・交流史の中の翻訳　　丸山　裕美子（愛知県立大学日本文化学部）

12:20－12:40《討論・質疑応答》

――― 昼食　12:40－14:00 ―――

【第二部　歴史の光源としての古典文学】（14:00－15:50）　司会　久冨木原　玲（愛知県立大学日本文化学部）

14:00－14:20　①「古典の翻訳」という営為―『古事記』のチェコ語訳について―　　Karel Fiala（福井県文書館副館長）

14:20－14:40　②西欧文学理論の応用―日記文学研究を例に―　　今関　敏子（川村学園女子大学）

14:40－14:45　★コメンテーター★

・翻訳・言語・社会　　犬飼　隆（愛知県立大学日本文化学部）

14:45－15:05　①伝承と翻案の混在―『八犬伝』の一場面をめぐって―　　三宅　宏幸（愛知県立大学日本文化学部）

15:05－15:25　②仏教という翻訳文化―知の継承・思想の主体をめぐって―　　上川　通夫（愛知県立大学日本文化学部）

15:25－15:30　★コメンテーター★

・伝承・仏教・文学　　高橋　亨（名古屋大学名誉教授）

15:30－15:50《討論・質疑応答》

――― 休憩　15:50－16:20（質問票の整理） ―――

【全体討論とまとめ】（16:20－17:00）

◆全体討論

◆まとめ　　総合司会　久冨木原　玲

主催：愛知県立大学　共催：愛知県立大学　地域連携センター

◇お問い合わせ先：
愛知県立大学 学術情報部 研究支援・地域連携課
TEL：0561-76-8843　E-mail：renke@bur.aichi-pu.ac.jp

◇交通アクセス：
●地下鉄「藤が丘」駅から八草行きリニモ（東部丘陵線）約 13 分「愛・地球博記念公園」駅下車徒歩 3 分
●愛知環状鉄道「八草」駅から藤が丘行きリニモ（東部丘陵線）約 3 分「愛・地球博記念公園」駅下車徒歩 3 分